

2025 年度論文輪読会第 7 回報告

日時： 2025 年 4 月 12 日 (土) 14:00~15:30

出席者数： 4 名

座長： 高波 鐵夫 (以下敬称略)

参加形式： オンライン Zoom ミーティング (担当： 関根 達夫)

論文紹介者： 前田 仁一郎 (会員)

論文名： Yamasaki et al., 2021, Subduction of the Izanagi-Pacific Ridge-transform intersection at the northeastern end of the Eurasian plate. *Geology*, 49, 952–957.

<https://pubs.geoscienceworld.org/gsa/geology/article-abstract/49/8/952/596509/Subduction-of-the-Izanagi-Pacific-Ridge-transform?redirectedFrom=fulltext>

内容要旨：

内容要旨： 紹介論文 (Yamasaki et al., 2021, *Geology*, v. 49) は、中央北海道の日高火成活動帯では 3 回のマグマパルス (46–45, 40–36, 19–18 Ma) があり、その内の始新世の 2 つのパルスにはアダカイト質 (的) マグマの活動があり、イザナギ-太平洋海嶺のユーラシア大陸縁への沈み込みに伴うスラブの窓に関連し、沈み込んでいたスラブの溶融によって生じたものであること、またその間のマグマ活動停止 (45–40 Ma) はその海嶺上にあったオフセットの大きい古トランスフォーム断層の沈み込みによるとする説を提唱した。この輪読会では Yamasaki et al. (2021) の紹介に加え、中央海嶺の沈み込みの一般論, Muller et al. (2016, *Annual Reviews of Earth and Planetary Sciences*, v. 44) や Wu & Wu (2019, *Geology*, v. 47) などの骨子も紹介した。そして Yamasaki et al. (2021) を初め、日高火成活動形成のテクトニック要因として現在提案されている説の (紹介者の知る限り) すべてはユーラシア東縁を活動場としており、日高火成活動帯を北アメリカプレート側に置くという考えとは相いれないことを述べた。最後に、北海道における当時のユーラシア・北アメリカ間プレート境界の位置の確定の重要性・必要性を述べ、共同研究を提案した。

前田 仁一郎（報告者）